

## 富澤靈岸先生と私

朝 治 啓 三

### 先生との出会い

先生と初めてお会いしたのは、私が学部四回生の十一月三日であった。その京都大学文学部西洋史読書会年次大会が岡崎の京都会馆二階の会議室で開催され、ドゥームズデイ・ブックにおける「農奴」の意味についての研究発表を、雨の中私は聞きに行った。当時は学部生の参加は珍しく、その日も私ひとりであったので落ち着かず、研究発表が終わるとすぐに退出して、階段を降りかけていたとき、先生が私の後から降りてこられたのであった。会場で先生は司会者から指名され、発表者に対して質問されたので、私は「この方が富澤先生か」と初めて知ったのである。その後、先生も会場を後にされたのだが、私はついにその場では名乗り出る勇気がなかった。

その年の七月、夏休み前の集中講義で、熊本大学の松垣裕教授がイングランド封建制の確立に関する集中講義を京大で行われ、受講した私はその実証、論理の緻密さに大いに感動し、自分もイングランド中世史を専攻すると決めて、富澤先生の『封建制と王政』を熟読していた。当時の私は初学者にありがちな未熟さで、先生の主張される封建制と王政の協調・併存という論旨に大いに疑問を感じていた。「制度」と「政治」が同一平面上で語られることさえ、非学問的だと思っていた。折角お会いできたのに、日頃の疑問を解決する機会を自ら捨ててしまうほどの、カラ元気ではなかったのである。物腰柔らかな先生には、初学者を無言で引き下がらせる威厳が、今から思えばあったのだ。

## 先生の教育

大学院に進んだ私は越智武臣先生に紹介して頂き、大阪樟蔭女子大学時代の富澤先生から直接指導を受けるようになった。高槻・日吉台のご自宅にしばしば伺い、質問し、原稿を読んで頂いた。学界の巨塔ともいべき田中正義先生、青山吉信先生、佐藤伊久男先生にも紹介して頂き、「イングランド中世史研究会」の研究集会にも、先生の口利きで出席させて頂いた。この研究会は私を鍛え、私は先学の偉大さにひれ伏す毎日であった。博士課程に進学すると、先生は私を正式のメンバーにするように計らって下さり、以後今日に至るまで私は先生の後について、学問の道を歩むことになった。



修士課程二年目に私は不覚にも大きな病気を患って、一年間を病床で過ごすことになり、予後も良くなか、退院しても自宅療養の日が続いた。ワープロなどなかった時代、病床で母に口述筆記してもらって仕上げた修士論文の原稿を先生のご自宅にお送りし、ご意見を伺うために、後日床から起き上がり、高槻を屈指した。先生は細かい点に至るまで間違いを指摘され、修正の仕方も伝授して下さいました。自分が師に恵まれていることをその時深く実感した。先生の奥様はお手製のクッキーを帰り際に私に持たせて下さり、私は胸が熱くなった。学恩に報いるには自己研鑽しかない、強く自覚した。

修士論文を公刊して以後も、論文を書くたびに、事前に原稿を読んで頂いた。『史林』の編者は、私が投稿すると、「富澤先生には読んで頂いたのか」と尋ね、「そうです」と答えると、「それなら受け取りましょう」といわれた。先生は科研の審査委員や『西洋史学』の編集委員を務められるなど、学界の重鎮であった。私は先生にはまさに学問の手ほどきから指導して頂

いていたのである。先生の口利きで、とある女子短大で非常勤講師として英国史の講義を始めたが、京大しか知らない私には授業の仕方が分からず、学生は私の講義についてこなくなった。それでも対処法が分からず、愚痴を述べる私に向かって先生は、高度な内容を分かりやすく話すのが熟練者の授業であり、それに至るには自己研鑽を怠ってはならない、とたしなめられた。決して媚びず、高い志を堅持する、私は決意した。

## 先生の研究

戦後の日本のインテリが、社会の近代化にいかに関与的に貢献するかを念頭に置いて研究活動をしていた、昭和二十年代に研究活動を始められた先生は、当時日本の西洋史学会を領導していた大塚史学とは距離を置きつつ、しかしその議論の舞台であったイングリッド中世社会の構造解明を自らの課題とされた。先生のお考えでは、封建制を超克すべき敵と見なすことに不十分さを感じ取り、中世社会の安定を維持した制度として積極的に評価するという方向へと向かわれたようである。島根時代に指導を受けたと言われる鯖田豊之先生の、フランス・マコンの城主支配圏の実証に感銘を受けておられた。イングリッド中世学の巨塔・田中正義先生の研究会が昭和三十六年に結成されると同時に参加され、アングロ・サクソン社会の封建化の解明を自らの課題とされ、昭和四十四年にはその研究成果『封建制と王政』に対して学位が授与された。

イングリッドには大陸と異なり、アングロ・サクソン末期以後、純粹培養的な王国が形成されたと見なす、当時の支配的学説に違和感を持っておられたが、青山吉信先生のように、クヌート北海帝国の一部としてイングリッド王国を位置づけるといふ新説を打ち出すことはなく、先生の場合には、征服者王家による中央集権的な国制と、国王とは封建契約で結ばれながらも、在地地主層の利害の代表としての意義をも有す大諸侯の合議による国制との協力関係によって、イングリッド独特の国制が育まれたと見なしておられた。協働という概念を国制に適用される点に、先生の思考様式の特徴が感じられる。一方が他方を打倒するという思考様式とは対立している、同じ研究会で先生のご発言を伺いながら私はそう感じた。

ヴィノグラドフ『イギリス荘園の成立』の翻訳にも力を入られた。田中先生に訳稿の校閲を依頼されたところ、朱を入れることに異存はないが、自分が手伝ったことは、決して謝辞の中に言及しないように、と厳命されたと同っている。この経緯を私にされたことは、私には教育の一つと思われた。その後、ご自身の誤訳に気付いて大いに悩まれ、二十年以上も経た後に、自費で改訂版を出版された。

科学研究費の研究会の主宰者としても活躍された。私はそのお手伝いをさせて頂き、研究会の二冊目と三冊目の研究論集へは私にも論文掲載の機会を与えられた。献呈論文集である三冊目は富澤先生のお誕生日に、ご自宅に伺って謹呈した。城戸毅先生の招聘でケムブリッジ大学からジェイムズ・ホルト教授を日本にお迎えし、関西でも講演会を開催したが、教授ご夫妻の関西御滞在中、一切の御世話を取先生が取り仕切られた。ホルト教授は大いに感謝され、ご帰英後、富澤先生をフィッツウィリアム・カレッジのフェローとして英国へ招聘され、王立歴史学協会のフェローに登録された。先生はその機会を利用して、英国各地を踏査され、ご自身が研究で言及された地、授業で扱った場所へ自ら足を運ばれた。出発前の準備ができた段階で、ご自宅に呼んで下さり、調査計画、訪問先の情報、かの地での研究報告原稿などを私に示して下さいました。一九八七年以後毎年訪英するようになる私の研究姿勢は、先生に由来する。

御退職間近に『イギリス中世文化史』を出版された。柔らかな語り口で、わが国ではあまり知られていない歴史上の諸事件を紹介されていることから見て、授業で用いられたノートに基づくとと思われる。越智先生が、「関西大学で富澤君の授業を受けた学生は幸せである。このような高度な内容を、分かりやすく語れる教授者は稀である」と語っておられるのを伺い、優れた研究者は良い教授者でもある、との思いを新たにしました。

## 先生の愛情

博士課程終了後も就職口に恵まれず四年が過ぎようとしていた私のために、先生はいろいろな機会を捉えて道が開けるように計らって下さった。紆余曲折の後、先生の跡を襲うことになったのは、私にとっては光栄の極みであるが、責任の重さを実感したというのが正直な気持ちである。論文の抜き刷りをお送りすると、必ず感想を書いたお手紙を頂戴した。時には研究室に訪ねてこられて、細かい間違いを指摘された。私は恐縮するばかりであった。学問に対して真剣で、納得できないまま中途半端で結論を出すということは一度もない。同時に、感情に左右されることなくいつも冷静で、高僧としての風格が周囲を落ちつかせた。葬儀の締めくくりの親族挨拶で、喪主の奥様に代わってお嬢様が「まじめな父は」と言われた時、ご家庭でもそうであったかと涙が止まらなかつた。先生が身罷れた今、先生の愛と学恩に報いるには、弟子としての私はより良き研究者を目指す他はないとの思いを、新たにしている。

先生と私の師弟関係を書き遺す機会はこの場しかないであろうという強い思いから、追悼文が私的内容になってしまったことを、読者にお詫びする他はない。